学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
２０１１年２月１２日
文責：ＪＵＮ

どうしていますか、授業の振り返り

１．教師の専門性は振り返りの経験で

間もなく本年度の１年間が終了します。この一年はどうでしたか？　わたしもそうでしたが、年度替りにはある種の感慨がわき、一年間のことをあれこれと思いだすものです。そこで、唐突ですが皆さんにお尋ねします。この一年間、授業や子どもへの対応について、どれだけの振り返りをされましたか。そして、その振り返りはどのようなものだったでしょうか。

わたしは、教師の専門性は、マニュアルにあてはめて身につくものではなく、経験の蓄積で磨かれていくものだと述べてきました。それは、膨大な文化や学問をもとに子どもが学ぶ教材として組み立て、さまざまな個性・能力・人格を有する何人もの子どもを対象に一人ひとりの違いに応じてはたらきかけ、日によって時間によって様相を変え絡み合う教材と子どもの実像をその場その場で瞬時に察知し判断して子どもの学びを生み出すのが教師の仕事だからです。

この複雑な教師の専門性は、経験しなければ身につかないのです。もちろん教科の内容や教育の方法について専門的な知識を養う研究は欠かせません。しかし、本を読んだり、講義を聴いたり、何かを調べたりといった研究だけではだめなのです。それは、生きた子どもに向き合い、子どもを教え育てるという仕事には職人的な熟達が必要だからです。いわば職人としての勘のようなもの、つまり感性がないと、信頼関係に基づく子どもへのはたらきかけができないのです。

では、教師は何年もしないと専門性は磨かれないのか、また何年も教師をすれば自然に磨かれるのかというとそうではありません。わたしの言う経験とは、ただ授業をするだけの経験ではないからです。専門性開発につながる経験、それは、振り返りの経験です。授業のやりっ放しではなく、自らの授業をどれだけ振り返ったかという経験が必要なのです。自分を見つめない経験では何事も生まれないからです。

それで、皆さんに思い起こしてもらおうとしたのです。どれだけの量の授業の振り返りをされたのか、そして、それはどのようなものであったのかと。

２　日常的な振り返り、本格的な振り返り

教師は、授業や学校行事、そして子どもへの対応で目の回るような日を送っています。ですから、振り返りを丁寧に実行する時間を見出すのに苦労しています。ちょっとした息抜きのコーヒータイムや帰路の車中で、または帰宅してから湯船や布団の中で、ある

いは書斎の机の前でその日のことを思い起こすといったことはだれでも普通に行っていますが、それだけだとその振り返りはその時だけの断片的なものになり、しっかりした振り返りにはなりません。

わたしが実行していたのは、それを文字にするということでした。文章ではなく文字にすると言い表したのは、文章にしなければと思うと長続きしないと思ったからです。とにかく、その日その日の振り返りを書きつけることをノルマにしたのです。書くということは思考を伴います。そして、そのことをしっかり意識化できます。さらによいのは、文字として残りますから、今後につながるのです。

わたしがしていたことで、それよりさらに積極的なことがありました。それは、授業を録音・撮影するということです。ビデオが普及していない頃は、テープレコーダーを机の上に置いて録音し、後でそれを聴きました。ビデオが出てきてからは据え置きで撮影して見ました。これは、大変効果的だったと思います。もちろん毎日そういうことをしていたわけではありません。だからと言って盆と正月というわけではなく、かなりの頻度で実行していました。

と、ここまで日常的な振り返りについて述べてきたわけですが、それだけでは不十分なことは灯を見るより明らかです。教師には、そういう日常的なものとともに、自分の授業の「今」を自覚する、詳細な振り返りが必要なのです。日常的なものが気軽にできる自己評価であるのに対して、これは、授業を公開して他者のコメントを受ける本格的な振り返りです。その機会がこの一年間にどれだけあるかによって、わたしの言う経験の濃さが決まってくるのです。

３　振り返りのあり方

まずは、授業研究の場がきちっと位置づいている学校にすることが大切です。教師一人ひとりのもっとも身近な他者は同僚だし、授業の対象である子どもにも近く、しかも自分のことを継続的にみてくれる存在が同僚ですから、学校を授業について学び合う場にすることはもっとも大切なことです。学校をそのような場にするためにどういうことが大切かについて、まずしっかり考えなければいけないでしょう。年度替わりを経て、学校は新年度のスタートを切りますが、こういうリセットのチャンスを生かして、是非前向きに取り組んでもらいたいものです。

そこで、本稿では、公開授業をしてさまざまな指摘を受けたとして、そのコメントをその後の授業づくりにどのように生かしていけばよいのかということについて述べてみようと思います。

まず、公開授業に際して、それがどのような授業になろうと、その事実から逃げないという覚悟をすることです。よい授業にならなかったらそれでよいのです。ピアノの発表会のようなものなら、とことん練習して完璧な演奏をしようとするでしょう。けれども、授業研究はよい授業の発表会ではありません。教師の専門性を磨く場なのです。ですから、その時の自分の精一杯の授業をして、その結果から学べばよいのです。ですから、結果から絶対に逃げないという覚悟が要るのです。大切なのは、授業者として学ぶことであり、学んだことを次につなげていくことです。

たとえば、子どもが見えていないという指摘を受けたとしましょう。これは、教師としてかなりショックなことです。教師の仕事は、子どもにきちんとかかわってなんぼ？のものですから、その子どものことが見えていないというのですから。

教室には何人もの子どもがいます。その子ども一人ひとりを見るということは、ことばほど簡単なことではありません。しかも授業という場では、教師は何かを教えようとしているわけです。その教材と子どもの反応をつなぎ合わせながら授業を進めていく時、さまざまなことが教師の頭の中を巡ります。それでも、学ぶのは子どもなのですから、一人ひとりの子どものことに気を配り続けなければいけません。それには教師としての感性がかなり必要だと考え、その指摘はそれを磨くチャンスだと考えることです。

それには、自分の見えなかった事実を知ることです。授業のあの時、子どもはどうだったのかを知ることです。もし、子どもたちが学びへの集中をなくしていたと指摘されたら、それはどういう状態になっていたのかという事実を知ろうとすることです。授業の時にそれが見えなかったわけですから、それがどんな状態だったのかを確かめないでは何も学べないからです。そういう意味では、授業は、授業がよく見える人の手でビデオ撮影しておくとよいのです。その映像を多少のプライドを捨てて見ることです。とにかく事実に出合わない限り、教師は変われません。ビデオをみて、この子どもはこんな表情をしていたのか、この子どもはもう完全に学びから遠ざかってしまったとかわかると、それはきっと、翌日からの子どもをみる目につながるでしょう。もちろん、翌日からすぐにみえるようになるわけではありません。それでいいのです。その自覚をもって実践を重ねていくことで「みえる」感覚が生まれてくるのです。

子どものことではなく、テキストのことで指摘を受けることもあるでしょう。たとえば、どうしてこの課題にしたのかとか、この子どもの発言になぜそういう方向で取り上げたのかとか、こんな素敵な考えが子どもたちから出ているのに、その後どうしてそれとかかわりのない方向に持っていったのかといったことです。これらにはすべて、教師がテキストまたは授業のテーマをどのようにとらえているかが背景にあります。ということは、授業者にそれだけのテキストの読み込み、テーマの理解がなかったということを表しています。そういうときに、それを指摘されるわけですから、授業者としては、協議会のその場では狐につままれたような気持ちになりがちです。場合によっては、それがどういうことなのかもわからなくなるということもあるでしょう。

学びの中身は、何をテーマにして、何をテキストとして行うかによって決まります。それだけに、指導をする教師は、テーマやテキストに関して十分すぎるほどの研究をしていなければなりません。けれども、何日間もかけて研究しても、みえないものはみえないということがあります。ですから、こういうことが起こるのです。

わたしも経験していますが、こういう状態になった協議会は、自分の力のなさというか、教養のなさというか、そういった思いでいっぱいになり、穴でもあったら入りたい気持ちに陥ります。けれども、その恥ずかしさが教師の専門性を養ってくれるのです。教師として成長するには、恥ずかしい経験をたくさんするしかないのですから。

けれども、ただ恥ずかしかったというだけでは成長できません。指摘を受けた背景にあるテキストの内容はどういうものだったのか、その事実にきちっと向き合うことです。わからなかったら、それはどういう意味なのか納得できるまで尋ねることです。

そのうちに、自分も指摘をしてくれた人のようにテキストがみえるようになりたいと思うようになります。その思いを抱くことで、これからの自分がしなければならないことがみえてきます。それが仮に文学の授業だったら、いかに自分が文学というものがわかっていなかったということですから、それを知るには、とにかくたくさんの文学を読むことだということになるでしょう。

教師の専門性は、マニュアルで身につくものではありませんが、だからと言って、ちょっとした実践ですぐ身につくものでもありません。いくつもいくつもの振り返りの経験を重ねることで、少しずつ少しずつ形成されていくものです。わたしが多大な影響を受けた斎藤喜博先生の著書に『教師が教師になるとき』というのがありますが、教師は、退職するそのときまで、教師になろうとし続けるのだと思います。

新たな挑戦課題に出合うこともあります。その授業に一定の手応えがあったと感じた授業でも、そのよさを認めてもらったうえで、新たな課題が登場することがあります。たとえば、「子どもたちは意欲的に学んでいたし、落ち着いて互いの考えを聴くこともできていた、グループの学習もきちっと取り組めている、とてもいい状態で、よくここまでクラスをつくってきたね」と認められた後で、「ここまで来たのだから、子どもの聴き方もただ聴くだけでなくつながりをつくれるようになるといいね。そうなったとき、それは本当の学び合いになります。今の状態だと互いの考えを出し合う話し合いの段階ですね」とか、「子どもからとてもよい考えが出ています。けれども、授業の後半になると、もうわかってしまっているから集中力が切れてしまっています。後半にどうしても学びの『ジャンプ』を仕掛けたいですね」とかいったケースです。

わたしはいつも言います、実践者として新しい課題が見えるほど幸運なことはないと。公開授業は、決して褒めてもらうためだけに行うものではありません。もちろん褒められることは喜びです。いろいろと取り組んできたことが報われた気持ちがわきます。けれども、公開授業をしていちばんうれしいことは、子どもたちの学びを引き受ける教師として、少しずつ教師としての専門性が深まることでしょう。ですから、次の挑戦課題がみつかることがいちばんよいことなのです。

教師が教師として成長するには、実践するしかありません。本を読んだり、他の教師の授業を参観したりすることも大切ですが、もっと大切なのはやってみることです。やってみなければ何も生まれないのですから。その際、もっとも忘れてはならないのは、事実に謙虚であるべきだということです。うぬぼれと自己弁護、安易な模倣、そして、徹底的にやらないうちの諦めは何ももたらしません。急がないことです。教師の専門性はゆっくりとしか養えないのです。

本稿は、かなり具体性の欠けた、精神論的な文章になりました。けれども、年度替りのこの時期なので、あえて文章にしました。

最後に、わたしがいつも心に浮かべることばを掲げます。

〝弱さのない人はいない〟

人はみんな弱い存在です。もしいま悩んでいる人がいたら、それはあなただけではないのです。弱さのない人なんていないのです。弱さがあるから人として成長できるのです。わたしはいつもそう自分に語りかけてきました。